

(2) カーネーション

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
ウイルス病 (CLV、CNFV、 CVMoV、CERV、 CarMV)	<ol style="list-style-type: none"> ①無病苗を使用する。 ②挿し穂は健全株から採穂するとともに、育苗時に疑わしい症状を示した苗は定植しない。 ③被害株は発見次第取り除く。 ④アブラムシ類の侵入を防ぐ(アブラムシ類の項参照)。 ⑤作業に使用するハサミや手指は、こまめに消毒する。 	<ol style="list-style-type: none"> ①アブラムシ類を防除する。(アブラムシ類の項参照)
<p>【参考事項】 CarMVは多犯性であるので、ほ場周辺の除草等、周辺環境衛生にも十分注意する。 CLV、CarMV、CVMoV、CERVは汁液伝染するとされる。</p>		
萎凋細菌病 (細菌)	<ol style="list-style-type: none"> ①無病苗を使用する。 ②無病株から採穂した挿し穂を用いる。 ③挿芽箱の消毒など苗床の衛生管理に努める。 ④発病株は隣接株も含めて早めに除去し適切に処分する。挿芽箱で発病した場合は箱内の苗を全て処分する。 ⑤罹病株を切り取った刃物等で健全株を切るとその切り口から伝染するので、注意する。 ⑥栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 	<ol style="list-style-type: none"> ①植付け前に土壌消毒を行う。 (例) クロルピクリンくん蒸剤(クロールピクリンなど) ダズメット粉粒剤(ガスタード微粒剤、パスアミド微粒剤)
<p>【参考事項】 耐病性に品種間差異が見られる。 高温期に発生しやすく、株全体が一気に萎れ症状となり、低温期には茎に2～3cmの縦の裂け目ができる。 低温期は保菌していても無病徴の場合があり、そこから採穂した穂を定植すると発病する。 茎を切断し水に浸漬すると、切断面から白色の菌泥が流出する。</p>		
灰色かび病 (<i>Botrytis</i>)	<ol style="list-style-type: none"> ①ハウス内が多湿のとき発生しやすいので、通風を良くし、乾燥を図る。 ②小型斑点のうちに発病花を除去し、適切に処分する。 ③栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 	<ol style="list-style-type: none"> ①淡褐色で水浸状の小斑点のうちに防除する。 (例) フルジオキシニル水和剤(セイビアーフロアブル20) マンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤)
<p>【参考事項】 耐性菌が生じやすい病害であるので、同一系統の農薬を連用しない。</p>		
斑点病 (<i>Alternaria</i>)	<ol style="list-style-type: none"> ①被害葉は早めに取り除き、適切に処分する。 ②栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 ③無病株から採穂した挿し穂を用いる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①いったん発生すると徐々にまん延し続け、次第に激しくなっていくので、初発時に農薬による防除を徹底する。 (例) ポリオキシシン乳剤(ポリオキシシンAL乳剤) TPN水和剤(ダコニール1000)
<p>【参考事項】 主に葉・茎・蕾に発生するが、冷蔵中の苗に発生し苗腐れを起こすことがある。 初発は下葉の葉身に暗緑色水浸状の小斑点が現れ始める。しだいに拡大して病斑部が灰白色～褐色で健全部との境が明瞭な紫色となる。 初期病徴は斑点細菌病と酷似しているが、本病はやや進展した病斑上に黒色すす状の粉(孢子)を形成する。</p>		
立枯病 (<i>Fusarium</i>)	<ol style="list-style-type: none"> ①発病株は早めに除去し適切に処分する。 ②栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 ③健全株から採穂した挿し穂を用いる。 ④挿芽箱の消毒など苗床の衛生管理に努める。 ⑤作業に使用するハサミや手指はこまめに消毒する。 	<ol style="list-style-type: none"> ①植付け前に、土壌消毒を行う。 (例) クロルピクリンくん蒸剤(クロールピクリンなど) ②定植時及び活着後に、農薬を灌注する。 (例) ヒドロキシイソキサゾール液剤(タチガレン液剤)
<p>【参考事項】 感染は葉節部にたまった水滴や摘心などの傷口から溢泌する液を介して起こり、これが拡大し立枯症状を起こす。</p>		

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
萎凋病 (<i>Fusarium</i>)	①発病株は早めに除去し適切に処分する。 ②栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 ③健全株から採穂した挿し穂を用いる。 ④挿芽箱の消毒など苗床の衛生管理に努める。 ⑤作業に使用するハサミや手指はこまめに消毒する。 【参考事項】 厚壁胞子の形で土壌中で長期間生存する。 初発は下葉の黄化で、上位葉に拡がっていき、下から5～6枚程度まで進むと上位葉の萎凋が始まる。 萎凋症状の現われ方は萎凋細菌病ほど急激でなく徐々に進行する。	①植付け前に、土壌消毒を行う。 (例) クロルピクリンくん蒸剤 (クロールピクリンなど) ダズメット粉粒剤 (ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤)
さび病 (<i>Uromyces</i>)	①発病葉は早めに取り除き、適切に処分する。(茎に発生した場合は、株ごと処分する)。 ②栽培終了後は植物残さの処分を丁寧に行う。 ③多湿環境にならないようにする。 【参考事項】 夏の発生は少なく、冬から春先にかけて発生が多い。	①発病初期から農薬を散布する。 (例) マンゼブ水和剤 (ジマンダイセン水和剤) メプロニル水和剤 (バシタック水和剤75)
アザミウマ類	①施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。0.8mm目合いの赤色系防虫ネットを使用すると侵入防止効果が高まる。 ②不必要な株、花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。 ③周辺の畑作物や雑草にも寄生するので、防除するか除草する。 ④発生施設では改植時に夏期では7日、春・秋期では14日程度密閉して蒸込みを行い、成虫や蛹を死滅させる。 【参考事項】 本種は花卉や芽の隙間に生息しているため、農薬は丁寧に散布する。	①生育期に粒剤を株元散布する。 (例) ベンフラカルブ粒剤 (オンコル粒剤5) ②発生初期から十分量の農薬を散布する。 (例) スピネトラム水和剤 (ディアナSC) トルフェンピラド水和剤 (ハチハチフロアブル) フィプロニル水和剤 (プリンスフロアブル)
アブラムシ類	①施設の開口部に目合い1mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。 ②ほ場周辺の除草をする。 【参考事項】 ウイルス病を媒介するので、初期防除に重点を置く。 農薬に対する抵抗性が発達しやすいので、異なる系統の農薬をローテーションで散布する。	①増殖が速いため、発生を見たら直ちに農薬で防除する。 (例) イミダクロプリド水和剤 (アドマイヤーフロアブル) エトフェンプロックス乳剤 (トレボン乳剤) クロチアニジン水溶液 (ダントツ水溶液)
タバコガ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ	①施設の開口部に目合い4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。 ②ほ場周辺を除草する。 ③黄色蛍光灯を設置する。 ④被害花蕾は発生次第取り除く。 【参考事項】 夏から初秋にかけて発生が多い。 蕾内に食入後は効果が劣るため、発生初期に防除する。	①発生初期 (若齢幼虫) から農薬を散布する。 (例) エマメクチン安息香酸塩乳剤 (アフファーム乳剤) フィプロニル水和剤 (プリンスフロアブル) メタフルミゾン水和剤 (アクセルフロアブル) レピメクチン乳剤 (アニキ乳剤) (以上、オオタバコガ) フルフェノクスロン乳剤 (カスケード乳剤) (タバコガ) テブフェノジド水和剤 (ロムダンフロアブル) (シロイチモジヨトウ)
ハダニ類	①発生源となるほ場周辺の雑草は除草する。 【参考事項】 ハダニ類は農薬に対する抵抗性が発達しやすいので、異なる系統の農薬をローテーションで散布するとともに、できる限り1剤当たりの年間散布回数を1回に抑える。	①発生初期から農薬を散布する。 (例) アセキノシル水和剤 (カネマイトフロアブル) アバメクチン乳剤 (アグリメック) ジェノクロル水和剤 (ペンタック水和剤) (施設栽培) テブフェンピラド乳剤 (ピラニカEW) ②化学農薬の効果が低い場合は、気門封鎖型農薬も活用して防除する。 (例) 還元澱粉糖化物液剤 (エコピタ液剤) デンブン液剤 (粘着くん液剤)